

河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

1989年3月

河内長野市教育委員会

序 文

河内長野市はここ数年、高層階の集合住宅をはじめとする住宅の建設ラッシュの様相を呈している。これを反映してか、先に大阪府から発表された、昭和63年10月1日現在の府内市町村の推計人口によると、河内長野市は前年比4,951人増で府下最高という。

地域開発の推進と埋蔵文化財の保護は表裏一体であり、古くて新しい問題である。各種の土木工事は土の下に眠る埋蔵文化財をゆりおこし破壊する危険を孕むものといわれて久しい。この意味で地域の有意義な開発は、埋蔵文化財の保護を十分に勘案したうえで行われなければならないであろう。

それは、地域開発によって移り住む人々にとって、埋蔵文化財がとりもなおさずその地の歴史の証人であるからである。

本書は、昭和63年度に本市内で実施した土木工事に伴う緊急発掘調査の成果を収録したものである。

これらの調査を実施し得たのは、ひとえに施主の方々の埋蔵文化財保護に関する深い理解によるものである。末尾ながら謝意を表するものである。

平成元年3月

河内長野市教育委員会
教育長 中尾謙二

目 次

例 言	1
はじめに	2
加塙遺跡	
1. 位置と環境	5
2. 調査に至る経過	5
3. 遺構と遺物	5
4. まとめ	13
長池窯跡群	
1. 位置と環境	14
2. 調査に至る経過	14
3. 遺構と遺物	14
4. まとめ	21

挿図目次

第1図 河内長野市遺跡分布図	3
加塙遺跡	
第2図 加塙遺跡遺構全体図	6
第3図 穫穴住居遺構実測図	7
第4図 穫穴住居出土遺物実測図	8
第5図 掘立柱建物Ⅰ遺構実測図	9
第6図 掘立柱建物Ⅰ出土遺物実測図	9
第7図 掘立柱建物Ⅱ遺構実測図	10
第8図 掘立柱建物Ⅱ出土遺物実測図	10
第9図 掘立柱建物Ⅲ遺構実測図	11

第10図	土壤遺構実測図	11
第11図	土壤出土遺物実測図	11
第12図	棚列遺構実測図	12
第13図	ピット出土遺物実測図	12
長池窯跡群		
第14図	長池窯跡群遺構全体図	15
第15図	溝1、2、溝3遺構実測図	16
第16図	土壤1、土壤2遺構実測図	16
第17図	土壤1、土壤2出土遺物実測図	17
第18図	周溝状遺構実測図	18
第19図	周溝状遺構出土遺物実測図	19
第20図	窓状遺構実測図	20

表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	4
第2表	加塙遺跡出土遺物観察表	22
第3表	長池窯跡群出土遺物実測図	23

図版目次

加塙遺跡

図版1	遺構 遺跡全景(東から)、掘立柱建物I、II、III全景(西から)
図版2	遺構 掘立柱建物II、III、土壤、 竪穴住居全景(東から)、竪穴住居全景(南から)
図版3	遺構 竪穴住居 窟状遺構、窓内遺物出土状況
図版4	遺構 住居内土器出土状況、土壤全景(南から)

- 図版5 遺構 柱穴内遺物出土状況、P 3 遺物出土状況
- 図版6 遺物 竪穴住居(1~11)
- 図版7 遺物 堀立柱建物I(12、13)、堀立柱建物II(14~18)、
土壤(19~21)、P 1(23)、P 3(22)
長池窯跡群
- 図版8 遺構 調査前全景、作業風景
- 図版9 遺構 遺跡全景(南から)、遺跡全景(北から)
- 図版10 遺構 溝1、2全景(北から)、溝3(南から)
- 図版11 遺構 溝3(西から)、周溝状遺構全景(北から)
- 図版12 遺構 周溝状遺構土器出土状況、土壤1全景(北から)
- 図版13 遺構 土壤2全景(東から)、窯状遺構全景(東から)
- 図版14 遺物 土壤1(25)、土壤2(26)、周溝状遺構(27~29)
- 図版15 遺物 周溝状遺構(30~32)

例　　言

1. 本書は昭和63年度に河内長野市教育委員会が国庫補助事業として計画、実施した塩谷遺跡ほか市内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦を担当者として、昭和63年4月1日から着手し平成元年3月31日をもって終了した。
3. 本書の執筆は遺構が尾谷雅彦、遺物を高田加容子・中村清美が行った。
4. 編集は尾谷が担当し、本書の文責は尾谷が負うものである。
5. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力を得た。
明地奈緒美・杉本祐子・鈴木雅子・古池陽子・田中美知代・甚口浩美・
小谷洋子・中田文・阪本桂子・金田佳子・平井令子・中野雅美・久保八重子
中西和子・喜多順子・乾利夫・福田昌弘
6. 調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。
奥田耕己・佐々木裕一・南口昇一・奥開宏・土井畑尚・有國正博・南裕之
・学校法人千代田学園（理事長 吉田博司・総務部長 竹内俊雄）・三和設計
・大末組・中央建設・島田組

はじめに

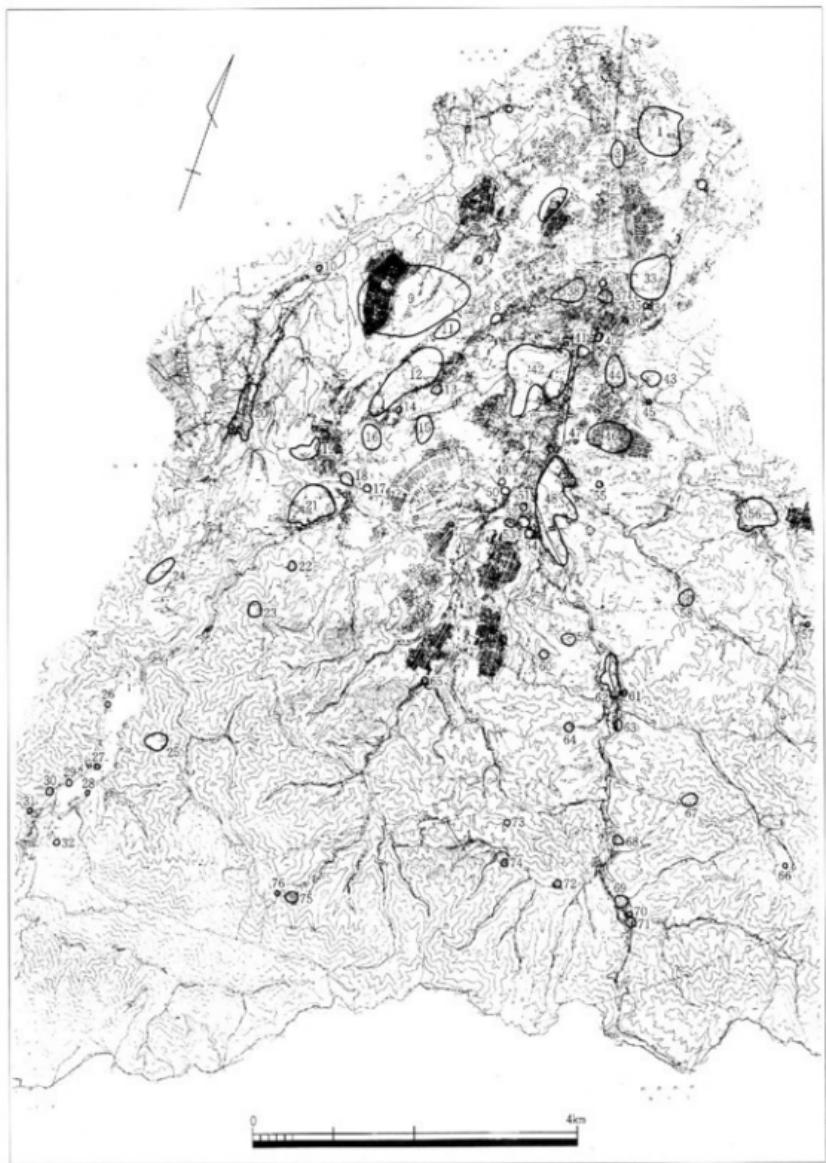
大阪府の東南端に位置する河内長野市は、旧河内国錦部群に属し、紀伊・大和・和泉の三国に接していた。この為、古代から交通の要所となったところである。現代の河内長野市は大阪市の通勤圏に位置し、住宅都市として年々人口の増加する町である。この為、住宅開発とあわせて交通アクセスの整備、住宅環境の整備など、公共投資も盛んである。この結果、地下に眠る埋蔵文化財への影響は増加するばかりである。

このような状況のなかで本市教育委員会は本年度から国庫及び府からの補助金を受けて発掘調査を実施してゆくことになった。

本年度の公共事業に対する埋蔵文化財の対応を除き、民間開発に伴う調査は以下の通りである。

発掘調査

遺跡名	調査期間	申請者	面積	区分	備考
加 塩	63.4/10~5/26	奥田 耕己	560m ²	病院建設	本書掲載
長池窯跡群	63.6/10~7/2	吉田 博司	1,300	学校用地	本書掲載
三 日 市	63.8/3	南口 畏一	8	個人住宅	遺構・遺物なし
三 日 市	63.8/3	南口 光男	8	個人住宅	遺構・遺物なし
本多藩陣屋	63.8/12	奥間 宏	8	個人住宅	遺構・遺物なし
尾 崎	63.11/25	土井畑 尚	8	個人住宅	遺構・遺物なし
塙 谷	63.12/14	有國 正博	8	個人住宅	遺構・遺物なし
塙 谷	元年.1/22	南 裕之	10	個人住宅	遺構・遺物なし



第1図 河内長野市遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塙谷遺跡	弥生時代～中世	40	長野神社遺跡	中世
2	千代田神社遺跡	中世	41	大日寺遺跡	
3	菱子尻遺跡	弥生時代～中世	42	鳥帽子形古墳	古墳時代
4	小山田1号古墓	奈良時代		鳥帽子形城跡	中世
5	小山田2号古墓	奈良時代		鳥帽子形八幡宮	中世
6	寺が池遺跡	旧石器時代～縄文時代	43	河合寺跡	中世
7	住吉元宮遺跡	中世	44	河合寺跡	中世
8	上原北遺跡			末広塚	中世
9	長池窯跡群	中世	45	末広塚	中世
10	青垣神社遺跡	中世	46	福田田遺跡	近世
11	塙穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	47	大師山南古墳	古墳時代前略～弥生時代中期
12	高向遺跡・高向南遺跡	弥生時代～中世	48	三日市遺跡・石仏遺跡	古墳時代
13	懸持寺跡	中世	49	小塙遺跡	旧石器時代～近世
14	高向神社遺跡	中世	50	加塙遺跡	
15	宮山古墳	古墳時代後期	51	尾崎遺跡	
16	高木遺跡	旧石器時代～縄文時代	52	尾崎遺跡	
17	峰山城跡	中世	53	加賀田神社遺跡	
18	日の谷城跡	中世	54	ジョウノマエ遺跡	
19	仁王山城跡	中世	55	栗山遺跡	
20	金剛寺		56	觀心寺跡	平安時代～
21	日野観音寺遺跡	中世	57	川上神社遺跡	中世
22	稻荷山城跡	中世	58	延命寺跡	
23	旗藏城跡	中世	59	石仏城跡	中世
24	国見城跡	中世	60	左近寺跡	中世
25	横現城跡	中世	61	薬師寺跡	中世
26	清水阿弥陀堂跡	近世	62	清水寺跡	中世
27	澗畠埋葬墓	近世	63	千早駅南遺跡	中世
28	中村阿弥陀堂跡	近世	64	地藏寺跡	
29	堂村地藏堂跡	近世	65	大江家	
30	天神社遺跡	中世	66	葛城第18経塚	
31	西の村阿弥陀堂跡	近世	67	旗尾城跡	中世
32	東の村觀音堂跡	近世	68	天見駅北方遺跡	中世
33	向野遺跡		69	蟹井淵北遺跡	中世
34	双子塚古墳伝承地		70	蟹井淵神社遺跡	中世
35	瓦の木古墳跡	古墳時代後期	71	蟹井淵南遺跡	中世
36	古野町遺跡	中世	72	流谷八幡神社遺跡	中世
37	膳所藩陣屋跡	近世	73	葛城第17経塚	中世
38	西代神社遺跡		74	薬師堂跡	中世
39	本多藩陣屋跡	近世	75	岩湧寺	中世
	法師塚古墳伝承地		76	葛城第15経塚	中世

第1表 河内長野市遺跡地名表

加塙遺跡

1. 位置と環境

当該遺跡は河内長野市加賀田3369番地他に所在する遺跡である。

遺跡は金剛・葛城山系から北に派生する丘陵の東裾部、石川の支流加賀田川を望む、標高120mの河岸段丘の東端に位置する。

当遺跡の周辺の遺跡としては、北側に近接して7世紀頃の須恵器が散布する小塙遺跡があり、加賀田川を挟んで東側1kmには古墳時代6世紀頃から中世の遺構・遺跡が検出された尾崎遺跡及び中世の遺構・遺跡が検出されたジョウノマエ遺跡が位置している。また、尾崎遺跡の南側の屋根上端には中世の遺構・遺跡が検出された加賀田神社遺跡が位置している。

また、丘陵の西側斜面には宮山古墳が位置している。

2. 調査に至る経過

当遺跡は当該地に開発の計画があり、原因者の届出により昭和63年4月1日の試掘調査を実施した結果、新たに発見されたものである。遺跡名は地名から加塙遺跡とした。遺跡の範囲は3,000m²以上と考えられる。

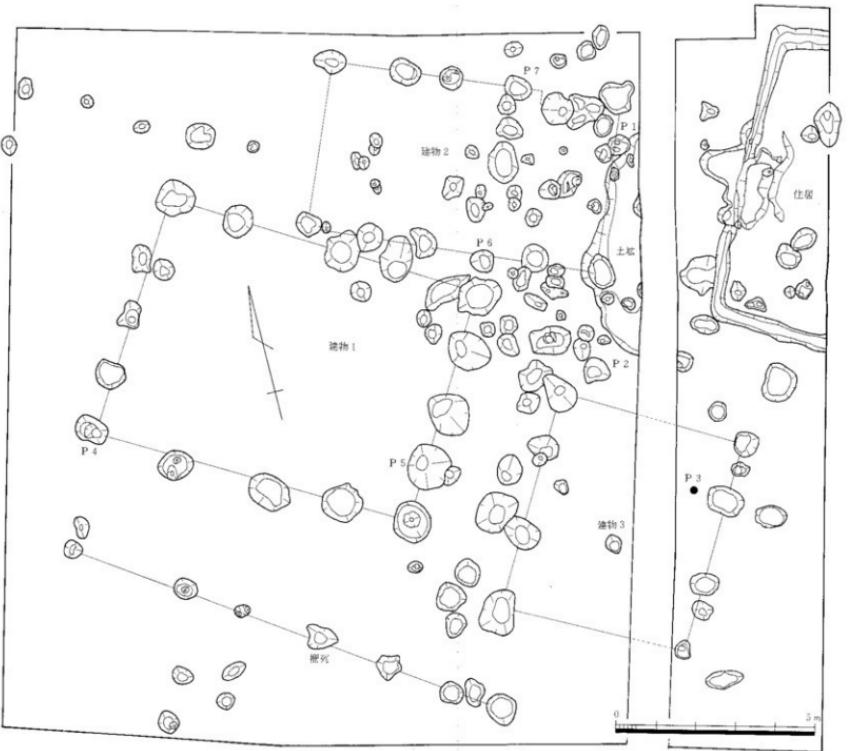
遺跡の発見後、原因者と協議した結果、調査対象は建物部分560m²について実施し、他分は盛土により保存されることとなった。

調査について、昭和63年4月9日に覚書を締結し、昭和63年4月11日から4月26日まで調査を実施した。また、この遺跡の北側でも須恵器の散布が密にみられ、新規発見の遺跡の小塙遺跡として登録した。

3. 遺構と遺跡

遺構検出面は現地表から浅く、耕土・床土を除去すると遺構が現われた。東側の深度の深いところでも、上層から耕土(20cm)・床土(5cm)・極暗褐色疊まり粘土(土器、炭、灰、焼土が交る。20cm)と成り、-40cmで遺構面となる。

遺構

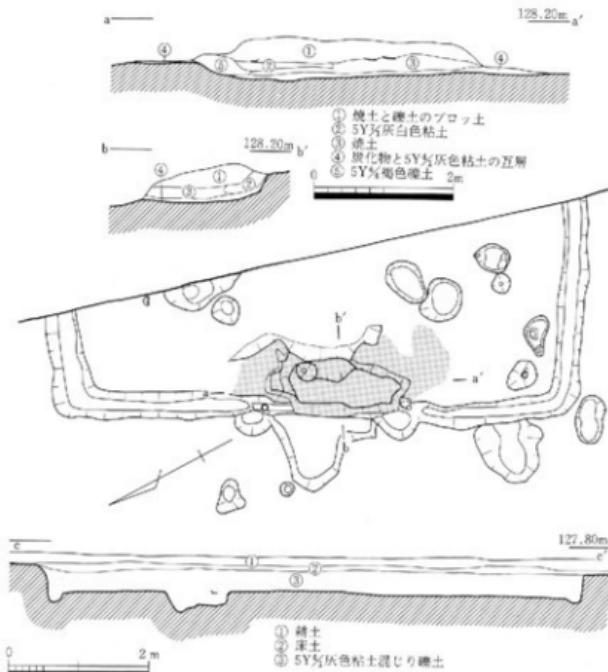


第2図 加塙遺跡遺構全体図

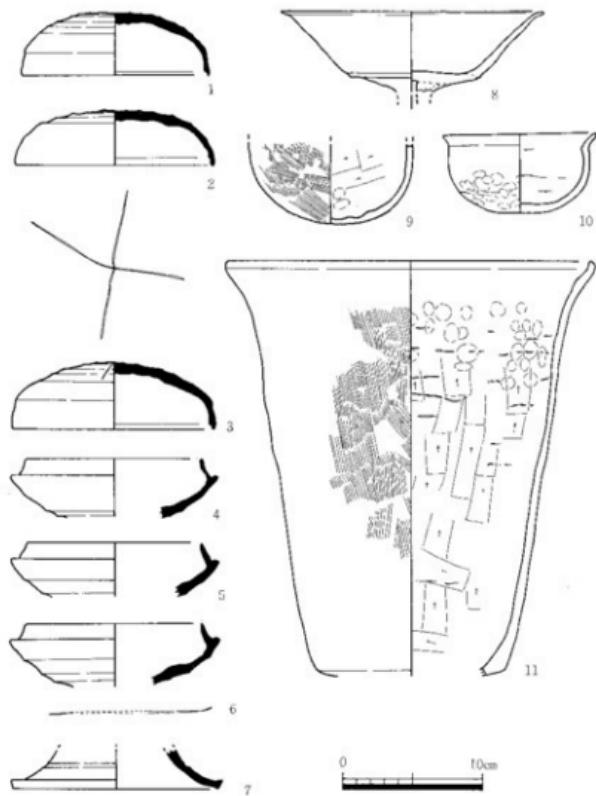
検出された遺構は掘立柱建物3棟、竪穴住居1棟、土壙1、柱穴状のピットが多数であった。

＜竪穴住居＞ 掘立柱建物IIの北東側3mに位置する。平面形が方形のカマドを持つ住居である。全容は判明しなかったが検出された一辺が7mで、主軸方向はN-60°-Wを示す。壁高は残存高30cmで、壁に沿って幅30cm、深さ10cmの壁溝が巡り、土師器の鉢がカマドの北側から出土している。住居内から8個の柱穴が検出されたが主柱穴を断定することは出来なかった。カマドは北西の壁中央に長幅1.8m、幅0.8mで検出されたが詳細は不明である。

遺物は、住居内埋土から須恵器杯身(4・5・6)、杯蓋(1・2・3)、高杯(7)、土師器高杯(8)、甕(9)が出土し、カマド内から甕(11)が出土している。また、壁溝内から鉢(10)が出土している。



第3図 竪穴住居遺構実測図

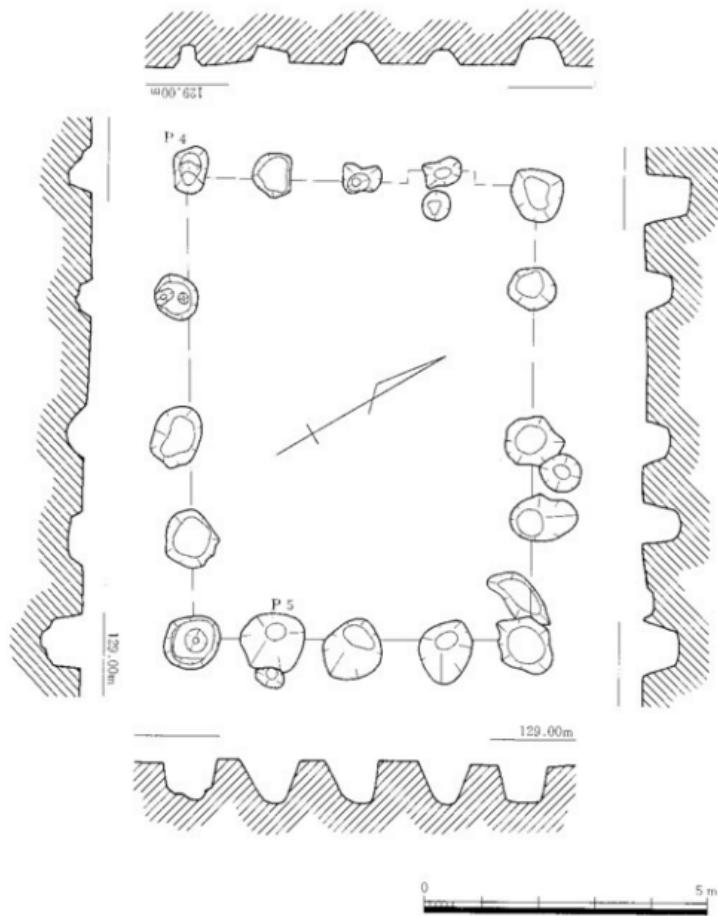


第4図 積穴式住居出土遺物実測図

<掘立柱建物 I> 調査区中央で検出された今回の調査で最大規模の建物で桁行4間(8m)×梁行4間(6m)で、主軸方向N-60°-W。柱間は桁行が2mから2.5m、梁行が1.5mから1.7mである。柱穴は径0.6~1m、深さ0.5~1m、埋土から須恵器・土師器片が出土している。

遺物は須恵器がP 4から杯蓋(12)とP 5から壺(13)が出土している。

<掘立柱建物 II> 掘立柱建物 I の東側2.5mに位置する。桁行4間(5.5m)×梁行1間?(0.8m)、主軸方向N-60°-W。柱穴は径0.4~1m、深さ0.5~1m、埋土から須恵器・土師器片が出土している。

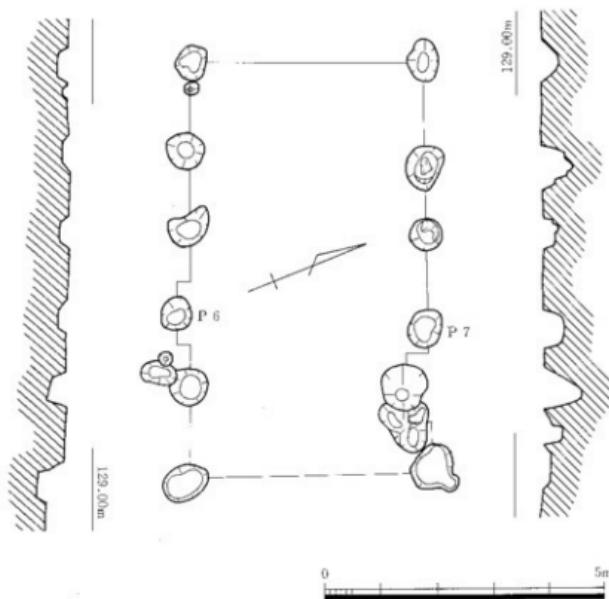


第5図 挖立柱建物I 遺構実測図

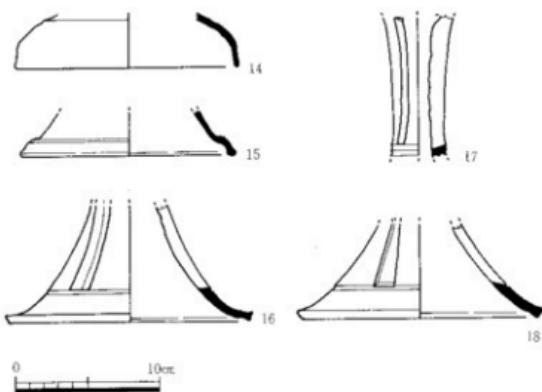


第6図 挖立柱建物I 出土遺物実測図

遺物は柱穴から須恵器が出土しており、P6から杯蓋(14)、脚付壺脚部(15)、高杯(16)、P7から高杯(17・18)が出土している。



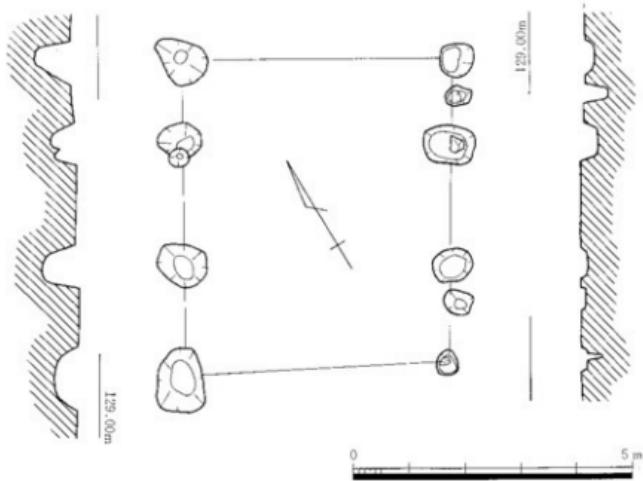
第7図 挖立柱建物Ⅱ 遺構実測図



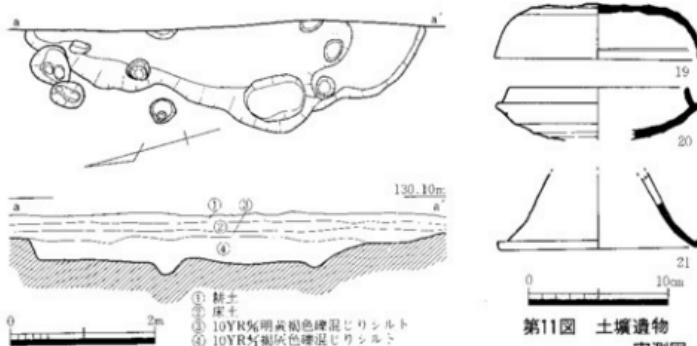
第8図 挖立柱建物Ⅱ 出土遺物実測図

<掘立柱建物Ⅲ>
掘立柱建物Ⅰの
北東側に接するよ
うに位置する。桁
行5間(7.5m)×
梁行間?(4m)、
主軸方向N-66°—
W。柱穴は径0.4
～1m、深さ0.5
～1m、埋土から
須恵器・土師器片

が出土している。遺物は実測可能なものは出土していない。



第9図 掘立柱建物Ⅲ 遺構実測図



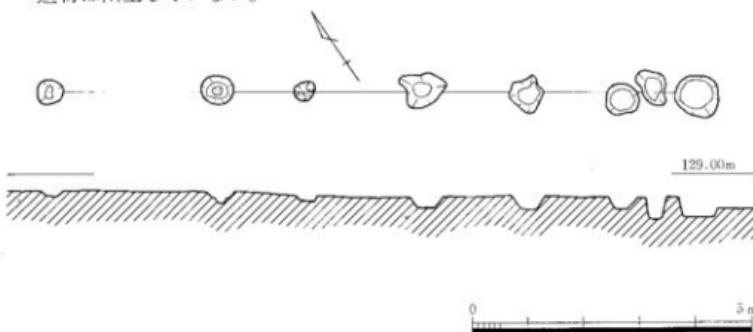
第10図 土壌遺構実測図

<土壤> 掘立柱建物Ⅱの東側梁行に接して西側部分が検出された。平面形は主軸がやや東に振る長楕円形のようである。長径5.6m、深さ0.3m。

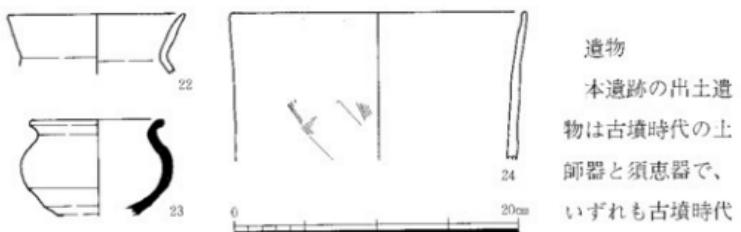
出土遺物で図示できたのは須恵器杯蓋(19)、杯身(20)、高脚部(21)である。

<棚列> 掘立柱建物Ⅰの桁行に平行して西南側2mを走る。柱間の間隔は一定ではない。柱穴の径は0.2m~0.3m。

遺物は出土していない。



第12図 棚列造構実測図



第13図 ピット出土遺物実測図

<土師器> 竪穴住居から高杯(8)、甕(9)、鉢(10)、甑(11)、が出土している。

甕と甑はカマドからの出土で、二次焼成を受けており、煮沸に使用されていたようである。高杯は、底部と体部の境に稜を残す形態のもので、底部外面にヘラミガキがかすかに見られる。鉢は口径10.85cmの小型のもので、他の土師器に比べやや精製された胎土を持ち、焼成も良好である。

ピットから出土している甕(22)は、(9)と同様の底体部を有すると思われる。

<須恵器> 蓋杯(1~6・12・14)、高杯脚部(7・16~18・21)広口蓋口縁部(13)短頸壺(23)、脚付壺脚部(15)が出土している。

蓋杯の蓋に稜はなく、口縁部は内傾する段をなすもの(1・2・3)と自然におさめるもの(12・14)、内面に1条の沈線をめぐらすもの(19)がある。

身は立ち上がりがやや短く、端部は自然におさめるもの(4・5・6)である。また(1・19)の天井部内面には同心円状アテ具のスタンプが残る。陶邑編年によれば、いずれもII-3に相当する。

高杯脚部は長方形または台形の透かしを2段に有するものが多いが、(21)のように1段だけの透かしを有するものもある。いずれも陶邑編年II-3に相当する。

ピット1から出土している短頸壺(23)は口縁部が外反するもので、やはり陶邑編年II-3に相当する。

遺物の詳細は別表の通りである。

4.まとめ

以上の結果、当遺跡の時期は須恵器から陶邑編年II-3を中心とするものである。

遺構の特徴としては、掘立柱建物I、III、竪穴住居が主軸を同じとしている。そして、須恵器の型式差はあまり見られず、平面的な配置を見る限り、同時に存在していたと考えたほうが妥当と思われる。また、土壌も同時期と考えられる。掘立柱建物IIは、掘立柱建物Iのピットを切っており、出土須恵器も後出の傾向を示している。このような掘立柱建物と竪穴住居のセットは石川上流では初めてである。

この時期の遺構は、天見川の右岸の三日市遺跡からも検出されている。三日市遺跡の場合は土壌と竪穴住居であるが、須恵器の型式差では1~2型式後出するものである。

このような状況から見て、石川最深部に位置する当遺跡周辺部では、竪穴住居が6世紀末ごろまで営まれていたようである。この地域の竪穴住居から掘立柱建物への移行する重要な資料である。

長池窯跡群

1. 位置と環境

調査場所は、南西から北東にのびる小山田丘陵の尾根上標高175m付近に位置する。東側は石川の河川段丘面、西側はマサンダ池の位置する谷部となっている。赤峰丘陵を中心とする小山田地区の丘陵内には古代末から中世に及ぶ所謂小型窯状遺構が分布する長池窯跡群の地域である。今回の調査地の東側斜面では5基が検出されており現在7箇所17基が確認されている。

また丘陵の東側、石川の左岸河岸段丘上には弥生時代から中世に渡る複合遺跡の高向遺跡が所在し、また、中世の上原遺跡も位置する。更に、横穴式石室を有する塚穴古墳も位置している。

2. 調査に至経過

当該地は、学校用地として開発されることになり、原団者からの事前協議があり、当該地が周知の遺跡長池窯跡群の範囲に含まれるため、調査が必要の旨回答した。結果、昭和62年7月1日に第1次調査について覚え書きを締結し、昭和62年7月23日から昭和62年7月29日まで第1次調査として範囲確認調査を実施した。結果、丘陵尾根部から遺構が確認され、昭和63年5月10日に第2次調査について覚え書きを締結し、昭和63年6月13日から昭和63年7月2日まで第2次調査として、遺構が確認された1,000m²について全面調査を実施した。

3. 遺構と遺物

遺構

調査地区全域から溝、土壙、窯、竪穴住居、ピット（小穴）が検出された。

＜溝1＞ 調査区の西端、尾根の等高線にそって、一部検出された。幅1m、深さ0.5m。

遺物は検出されなかった。

＜溝2＞ 調査区の西端、尾根の等高線にそって、溝1の東側0.9mに平行に検出された。この溝は調査区の南端で底が上り終っている。幅1m、深さ0.5



第14図 長池窯跡群遺構全体図

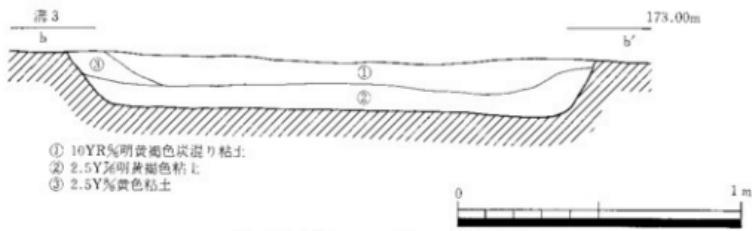
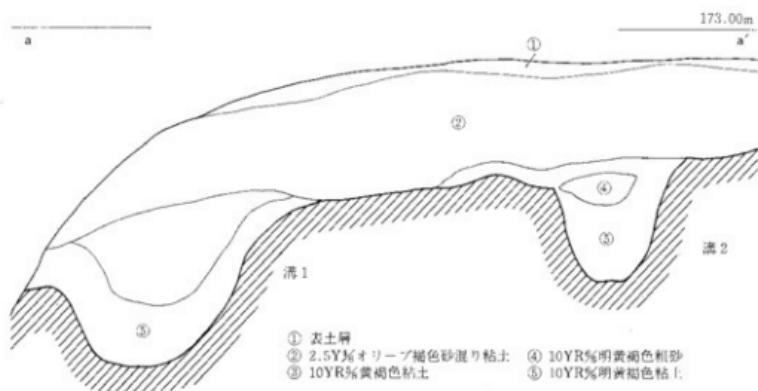
m。

遺物は検出されなかった。

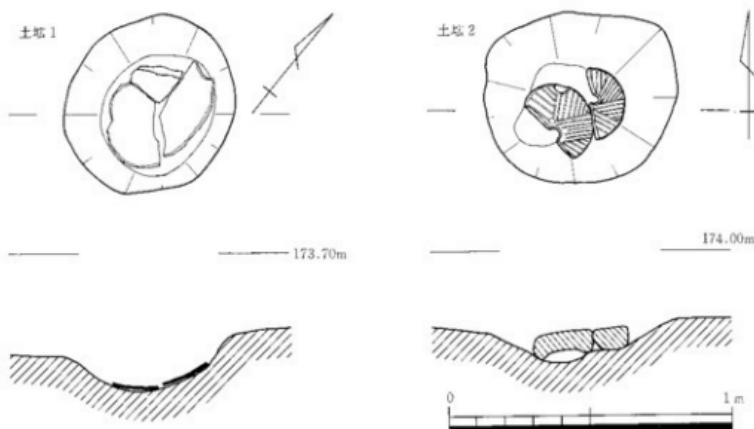
<溝3> 調査区の南端、尾根に直交に走り、溝2を切っている。幅2m、深さ0.2mで、遺物はサヌカイト、瓦質の甃片が出土している。

<土壤1> 調査区の中央に位置し、平面形は円形を呈する。径0.5m、深さ0.15m。土壤底部には、漆焼きの甃底部(27)が残存して出土している。

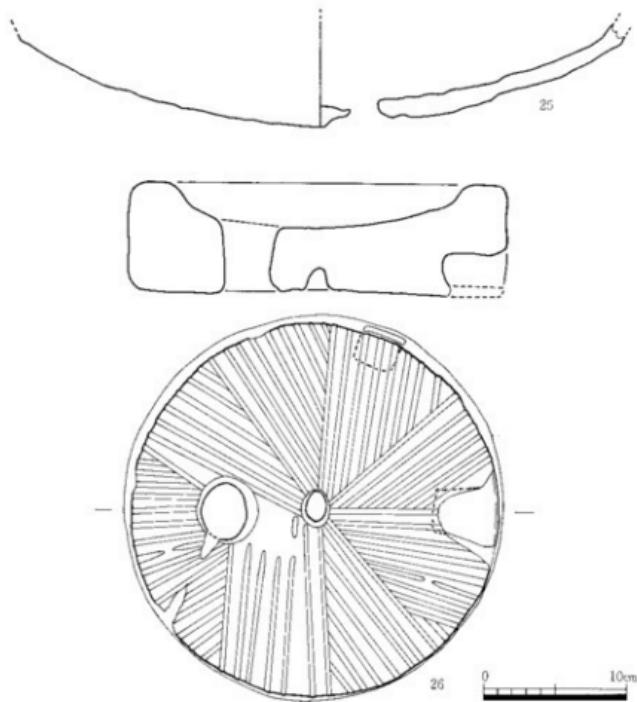
<土壤2> 調査区の中央に位置し、平面形は梢円形



第15図 溝1、2、溝3 遺構実測図



第16図 土壌1、土壤2 遺構実測図



第17図 土壌1、土壌2 出土遺物実測図

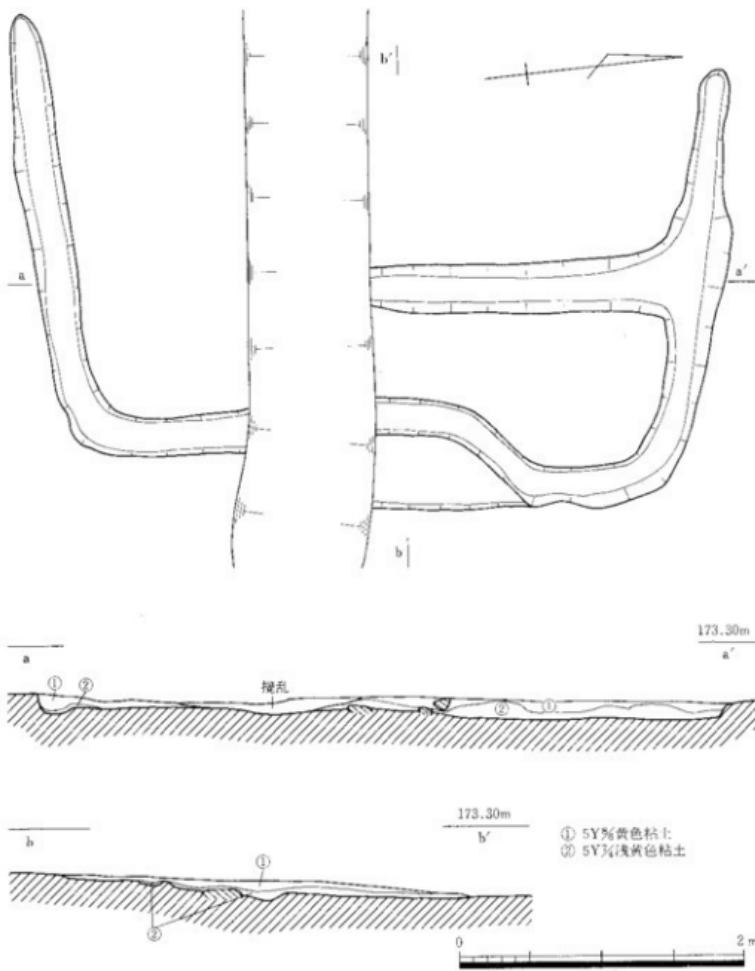
を呈する。長径 0.6 m、短径 0.5 m、深さ 0.15 m。

遺物は埋土中より、石臼の上部が 2 つに割れて出土した。(26)

<周溝状造構> 平面的にはコの字状に巡るが、東側の一辺が変形している。規模は南北 5 m、東西 3 m、溝幅 0.3 m、深さ 0.2 m。周溝内からは土器片、自然石が出土している。石は台石か砥石として利用されたような痕跡がある。

遺物は鉄釘(27)、土師質皿(28)、片口鉢(29)、使用痕のある自然石(30~32)が出土している。

<小型窯状造構> 調査区の南端から検出された。平面形は長方形を呈する。主軸方向 N-45°-W を示し、焼成口は南東に開口している。長辺 1.2 m、短辺 1.1 m、壁の残存高は 0.2 m。壁、床は熱を受け酸化し、幅 0.1 m で赤褐色酸化

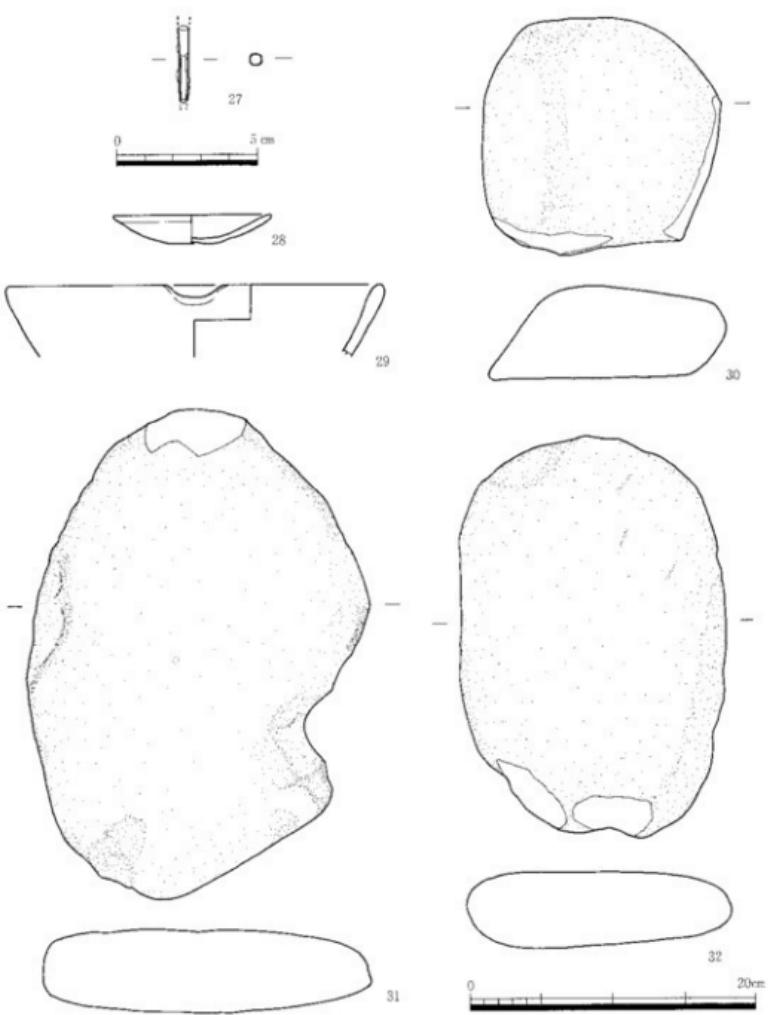


第18図 周溝状遺構実測図

層に変化している。

窯は形態から簡単な炭焼き窯である伏せ窯と考えられる。遺物は出土していない。

<ピット> 多数検出されたが、どれも建物などには復元できなかった。



第19図 周溝状構造出土遺物実測図

遺物

<土師質土器> いずれも小片で、摩滅が著しく調整等は不明瞭であった。

小皿（28）はやや深く底部が凹底氣味に窪むものである。



第20図 窯状遺構実測図

片口鉢（29）は丸みを持った小さな注口部を有するもので、内面には巻き上げ痕が残る。

甕底部（25）は丸みを持った平底で、中央部に径2～3cm程の穿孔がある。故意に穿たれたものかどうかは明らかでないが、焼成後に穿たれたものである。
 <石製品> 周溝状遺構から作業台様の石（30～32）が出土している。いずれも砂岩の自然石で、数ヶ所に使用痕と思われる小さな窪みと摩滅部分が見られる。また火を受けた痕があり、（31）は炭化物が付着している。

粉挽き臼（26）は花崗岩製の上臼で、かなり使用されていたらしく下面の摩

滅は著しい。また不均等に摩滅しており全体に大きく傾いている。挽き木を打ち込む穴も 2ヶ所に穿たれており、1つは摩滅により下面側が欠失している。目は一応 8 分画であるが、何度も打ち直されたらしく不揃いで、やはり非常に浅くなっている。側面の 2 箇所に火を受けた痕が見られる。

＜鉄製品＞ 釘 (27) が 1 点出土しているが、頭と先端部分を欠失している。断面は丸みを帯びた正方形である。

遺物の詳細は別表の通りである。

4. まとめ

以上の結果をまとめると以下の通りである。

1. 溝 1・2・3 は開削されている標高、形状から考えて、灌漑用の水路と考えるのは不自然であり、あるいは城砦関係の造構の可能性がある。
2. 窯状造構は、従来、長池窯跡群で検出された炭焼き窯と考えられている小型窯状造構に比べ、構造が単純な伏せ窯であった。この造構の時期は不明であるが、伏せ窯の検出は初めてであり、今後の市内の窯状造構を考える上で重要な事例となる。

第2表 加塙遺跡出土遺物観察表

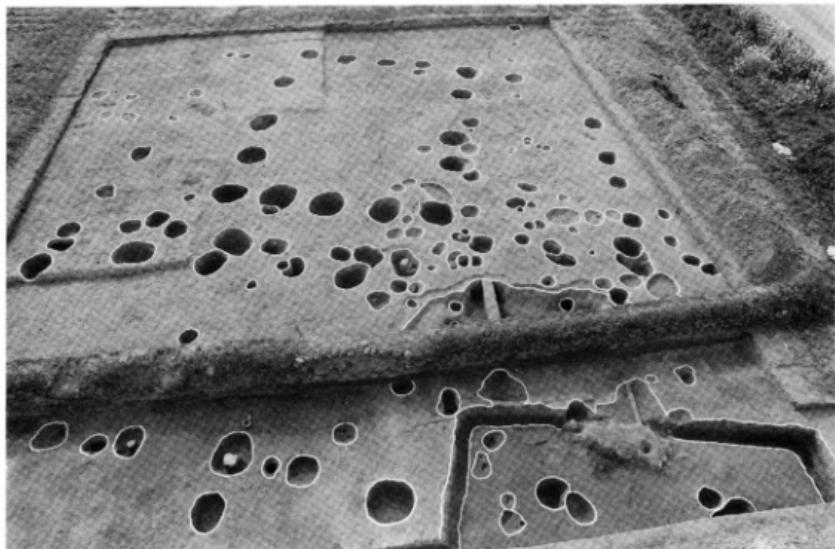
探査番号	出土遺構	種別	器種	法 量	胎上	成次	色 調	影響・手法の特徴	備考
4-1	竪穴住居	須恵器	蓋・杯	口 径 高さ (蓋)	13.4cm 4.5cm	密	青 黒	外: 青灰 内: 明青灰 底: 黑灰	I. 胎部は内側する段をなす。天井部外面上部は 凹凸でラケツリ。他は回転ナダ。天井部内面中央 に開心凹状アテ其の後を残す。ロクロ回転石。
4-2	竪穴住居	須恵器	蓋・杯	口 径 高さ (蓋)	14.2cm 3.9cm	密	青 黒	口縁部は内傾する段をなす。天井部外面上 部は凹凸でラケツリ。他は回転ナダ。ロクロ回 転石。	
4-3	竪穴住居 (窓内)	須恵器	蓋・杯	口 径 高さ (蓋)	14.6cm 4.8cm	密	青 黒	外: 明青灰～青灰 内: 淡紫灰 底: 明青灰	I. 胎部前面は内傾する段をなす。天井部外 面前面は凹凸でラケツリ。他は回転ナダ。窓内 部内面裏部は後不規方のテクスチャーを有す。天 井部外壁にヘッピ起分を残す。セクロロ回転石。
4-4	竪穴住居	須恵器	蓋・杯	口 径 受部径 (身)	12.4cm 14.8cm 3.85cm	密	青 黒	外: 黒灰～淡黄 内: 淡灰 底: 青灰～青灰	II. 縦縫部は大きい。底部外面凹輪へラケツリ。 他は回転ナダ。ロクロ回転石。
4-5	竪穴住居 (窓内)	須恵器	蓋・杯	口 径 受部径 残存高	12.4cm 14.9cm 3.85cm	密	青 黒	外: 黒灰～淡黄 内: 淡灰 底: 青灰～青灰	I. 縦縫部前に窓がある。底部外面凹輪へラケツリ。 他は回転ナダ。ロクロ回転石。
4-6	竪穴住居 (窓内)	須恵器	蓋・杯	口 径 受部径 残存高	12.55cm 15.5cm 4.5cm	密	青 黒	外: 黒、明青灰 内: 淡灰 底: 黑灰	II. 縦縫部は深い。底部外面へラケツリ。他 は回転ナダ。底部外面にヘッピ起分を有する。 ロクロ回転石。
4-7	竪穴住居	須恵器	蓋・杯	口 径 (脚部)	14.6cm 2.8cm	密	青 黒	外: 青、灰白 内: 明青灰	下方に浅い洗鍊を1条造らし、端部は内傾 する面をなす。底存部は凹輪ナダ。
4-8	竪穴住居	土師器	高 杯	口 径 (脚部)	18.8cm 5.8cm	密	青 黒	外: 青 内: 淡黄灰 底: 明青灰	底部と口縫部の縁に段をなす。口縫部は 外反し深い。口縫部は2～3段の巻き上げ によるもので、倒伏が残る。
4-9	竪穴住居 (窓内)	土師器	甕 (底部)	残存高	5.8cm	密	青 黒	外: にいい形 内: にふく眞理 底: 黑灰	体部から底部外側へハケ目。内面底部は指さ やく、体部はハラケツリ。
4-10	竪穴住居 (窓内)	土師器	甕	口 径 歩道最大径 高さ	10.85cm 10.1cm 5.7cm	密	青 黒	外: 淡黄 内: 淡青灰	底部外面洗拭サエ。内面小走方向ナダ。 他はヨコナダ。内外面に巻き上げの痕を残 す。
4-11	竪穴住居 (窓内)	土師器	甕	口 径 底 部 残存高	26.0cm 13.2cm 29.8cm	密	青 黒	によい黄相一時縫	底部には空孔があるか形態。脚部は不明。 I. 縦縫部のみともヨコナダ。体部の底上部 は指オサエ。他はハラケツリ。底部外壁には ハケ目。底部は内外面ともナダ。
6-12	柱立建物I (pit4)	須恵器	蓋・杯	口 径 (蓋)	13.2cm 3.6cm	やや密	青 黒	口縫部は深い。天井部外壁上部は凹輪へ ラケツリ。他は回転ナダ。	
6-13	柱立建物I (pit5)	須 恵 器	広口 盆	口 径 (脚部)	11.5cm 4.3cm	密	青 黒	外: 青灰 内: 明青灰	II. 縦縫部はやや厚厚し、外縁面は凹輪をな す。脚部はカキ目。他の残存部は凹輪ナダ。
8-14	柱立建物II (pit6)	須 恵 器	蓋・杯	口 径 (蓋)	16.95cm 4.0cm	密	青 黒	外: 明青灰 内: 黑灰	口縫部は深い。天井部外壁上部は凹輪へ ラケツリ。他は回転ナダ。ロクロ回転石。
8-15	柱立建物II (pit6)	須 恵 器	脚付 盆	脚 径 (脚部)	14.6cm 3.1cm	密	青 黒	外: 青、灰白 内: 黑灰	残存部は凹輪ナダ。
8-16	柱立建物II (pit6)	須 恵 器	高 杯	脚 径 (脚部)	16.95cm 8.4cm	密	青 黒	外: 青 内: 明青灰 底: 黑灰	長方形の透かしを3方向に有し、その下方 に1条の洗鍊を造らす。残存部は凹輪ナダ。
8-17	柱立建物II (pit7)	須 恵 器	高 杯	脚 径 (脚部)	10.0cm	密	青 黒	外: 青～淡青灰 内: 明青灰	長方形の透かしを3方向に有し、その下方 に2条の洗鍊を造らす。残存部は凹輪ナダ。

標印番号	出土遺物	種類	計量	法	形	質	焼成	色	調	影響・手法の特徴	備考
8-18	獨立式埴輪 (pit7)	須恵器 高杯 (脚部)	口径 残存高 6.8cm 6.8cm	密	外:灰 壁 内:灰白一二点 黄斑 新:灰白					台形の透かしを3方向に有し、その下方に1条の沈線を施す。残存部は倒伏ナダ。	
9-19	土 壁	須恵器 置杯 (蓋)	口径 高 4.0cm	密	外:灰白、白 内:灰 紙					口縁部は丸く、内面に1条の沈線を施す。大井型 外腹内輪ヘラケズリ。他は倒伏ナダ。天井部内側 中央に同じ四根アテ其筋が残る。ロクロ同軸右。	
9-20	上 壁	須恵器 蓋杯 (身)	口径 受部径 残存高 12.6cm 14.8cm 3.75cm	密	外:明オーリーブ灰 内:灰白		やや軟			口縁部は丸い。底跡部外面下部は延軸ヘラ ケズリ。他は倒伏ナダ。ロクロ同軸右。	
9-21	土 壁	須恵器 高杯 (脚部)	口径 残存高 14.4cm 5.4cm	密	外:灰 壁 内:灰白					透かしを有するが形態、個数は復元できな い。残存部倒伏ナダ。	
3-22	pit3	土 壁	置杯 (口縁丸)	口径 残存高 12.6cm 4.4cm	密	外:浅模 内:二点紅 新:淡黄灰	やや軟			体部内面はヘラケズリ。他の残存部はナダ。	
3-23	pit1	須恵器 短瓶壺	口径 侈口部大径 残存高 9.4cm 11.0cm 6.9cm	密	外:灰 壁 内:灰 紙					口縁部は丸い。体部外腹下部より底部は 延軸ヘラケズリ。他は倒伏ナダ。	
3-24	pit2	土 壁	器	口 縫 残存高 20.8cm 10.7cm	密	外:灰 壁 内:淡黄 新:淡黄	やや軟			体部から口縫部には延軸直に伸び、複部は 丸い。L律部外腹ヨコナダ、体部内面はハ ケズリ。	小片。内面は摩耗著 しい。

第3表 長池窯跡(千代田学園用地)出土遺物観察表

標印番号	出土遺物	種別	器種	法	量	計七	焼成	色	調	影響・手法の特徴	備考
17-25	土 壁 1	土師質土器	盤 (底部)	残存高	7.7cm	密	外:淡黄灰、相 對 壁 内:黄斑、灰白 壁:青灰			中太部に徑1~2mmの不定形の穿孔を有す る。内面は掌による圧痕が残る。	
17-26	土 壁 2	石 製 品	白	平均径 高	27.0cm 66.3~9.3cm	花崗岩	—	—	—	上面のくぼみの深さ2.6cm。糸は半分程であ るらしい心当等ではない。幾ヶ所水打ち込む穴は打ち直して2箇所に穿たれている。	例山2苗床に火を受 けた痕あり。
19-27	圓錐状遺構	金属製品	釘	残存長	2.75cm	鍍	—	—	—	頭部と先端部は欠損。表面は周の丸い正方 形を呈する。	
19-28	圓錐状遺構	土師質土器	小 盆	口 縫 高	11.0cm 2.0cm	密	外:淡黃灰 内:淡黃灰、灰白 壁:淡赤	やや軟		口縫部は丸い。内部はやや西灰氣味である。	小片。摩耗著しい。
19-29	圓錐状遺構	土師質土器	片 口鉢	口径 残存高	26.5cm 5.0cm	粗	外:灰 壁 内:灰 紙、淡黃 壁:青	やや軟		口縫部はやや肥厚したり。内面に巻き上げ 痕が残る。	小片。摩耗著しい。
19-30	圓錐状遺構	石 製 品	作業台 (底?)	長 幅	18.9cm 16.5cm 6.4cm	砂 壊	—	—	俊用板と思われる摩擦部分がある。	火を受けた痕あり。	
19-31	圓錐状遺構	石 製 品	作業台 (底?)	長 幅	34.3cm 23.7cm 5.5cm	砂 壊	—	—	数ヶ所に使用痕と思われる擦みと摩擦部分 がある。	火を受けた痕あり。 炭化物付着。	
19-32	圓錐状遺構	石 製 品	作業台 (底?)	長 幅	28.2cm 18.9cm 5.5cm	砂 壊	—	—	数ヶ所に使用痕と思われる擦みと摩擦部分 が見られる	火を受けた痕あり。	

図 版



遺跡全景（東から）



掘立柱建物Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ全景（西から）



掘立柱建物Ⅱ・Ⅲ、土塙、竪穴住居全景（東から）



竪穴住居全景（南から）



聚穴住居窓状遺構



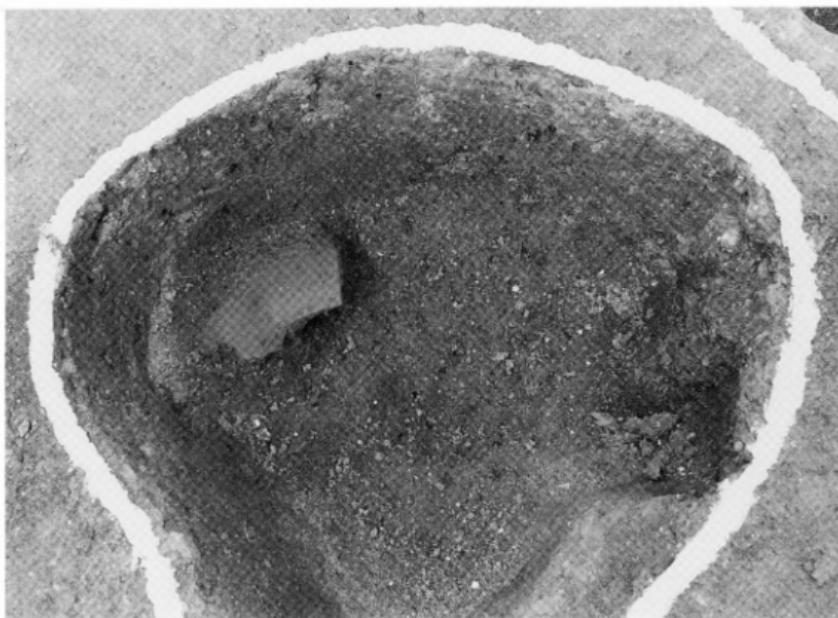
窓内遺物出土状況



住居内土器出土状況



土塁全景（南から）



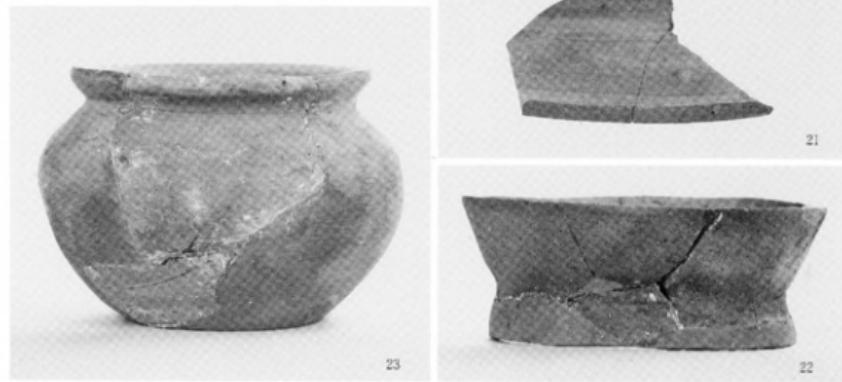
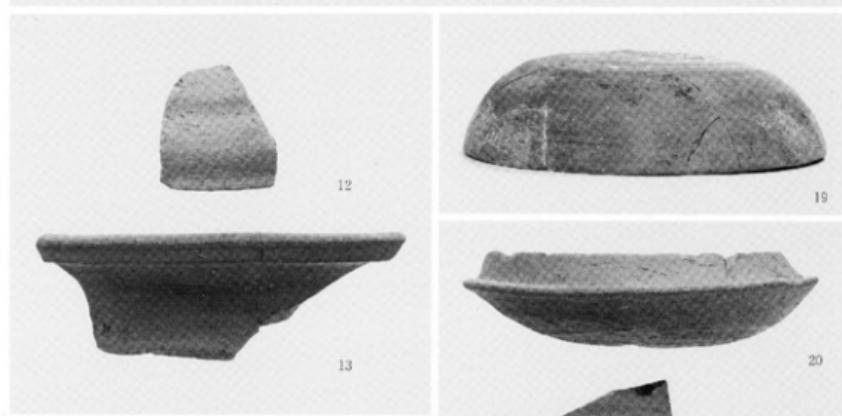
柱穴內遺物出土狀況



P 3 遺物出土狀況



竪穴住居 (1~11)



掘立柱建物 I (12、13) 掘立柱建物 II (14~18) 土塙 (19~21) P 1 (23) P 3 (22)



調査前全景



作業風景



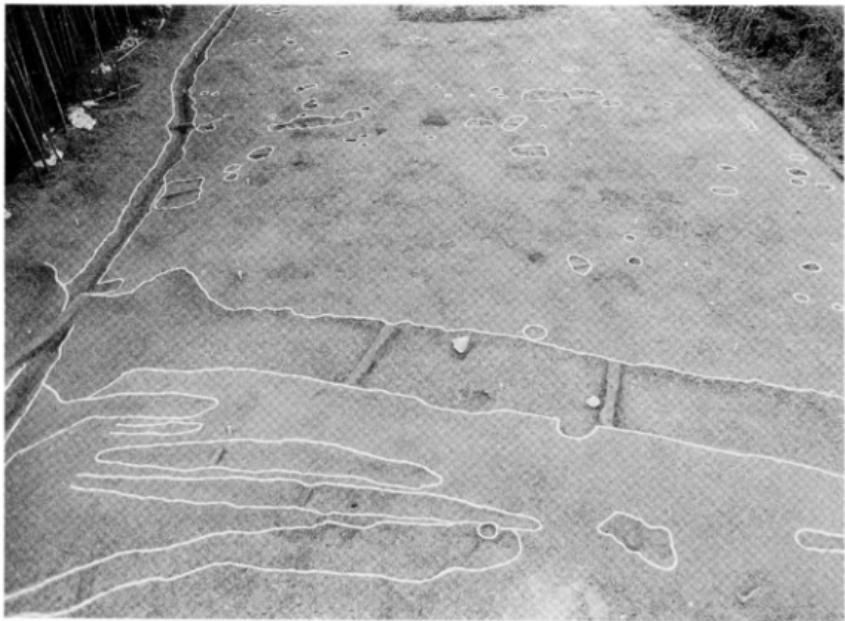
遺跡全景（南から）



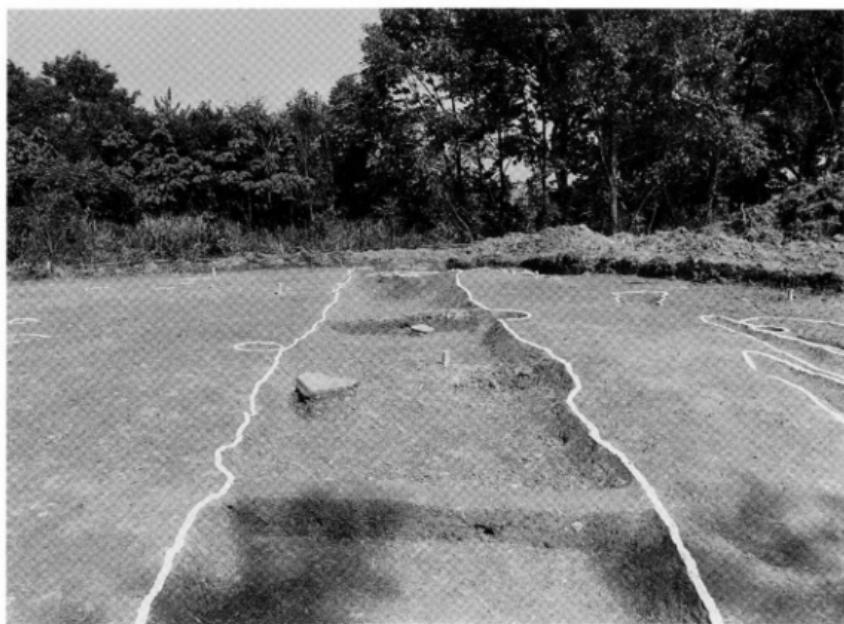
遺跡全景（北から）



溝1・2全景（北から）



溝3全景（南から）



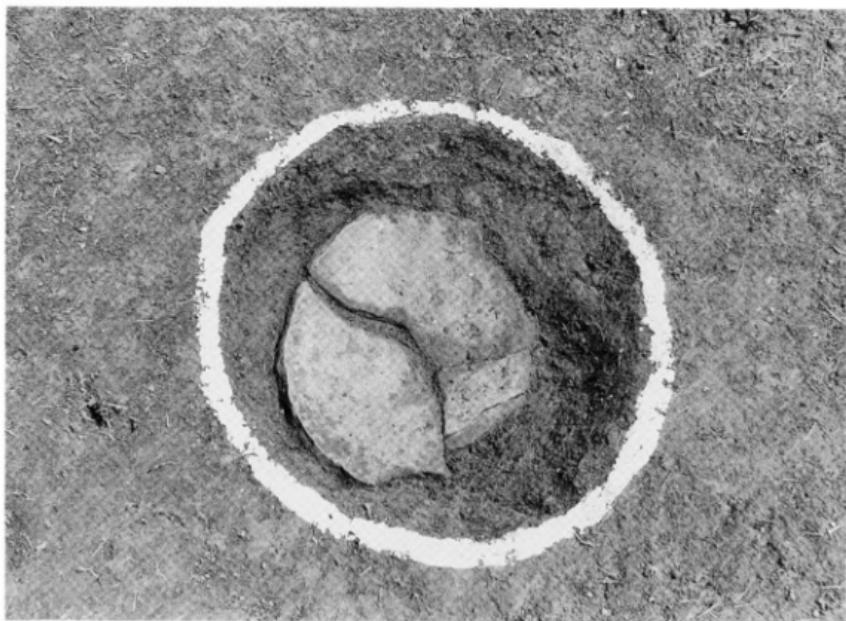
溝3（西から）



周溝状遺構全景（北から）



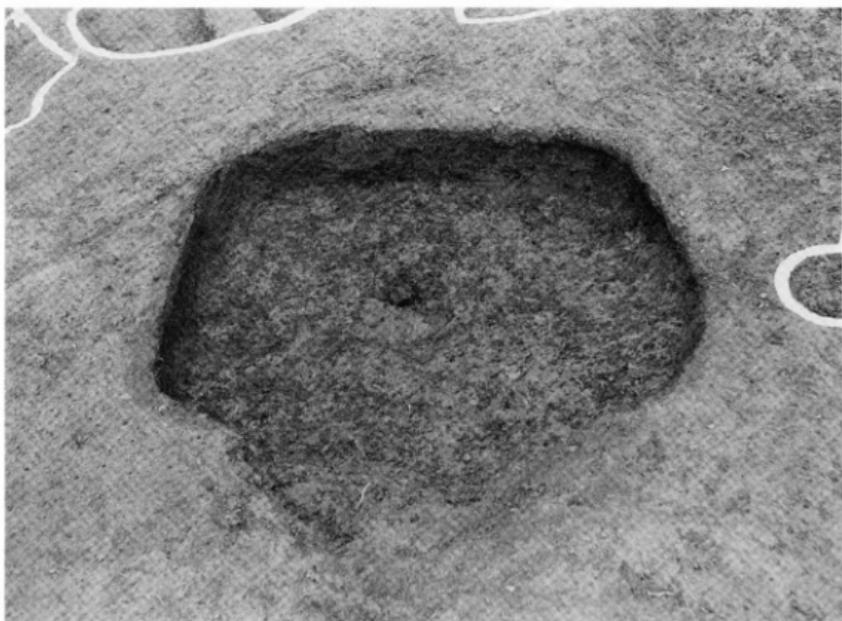
周溝状遺構土器出土状況



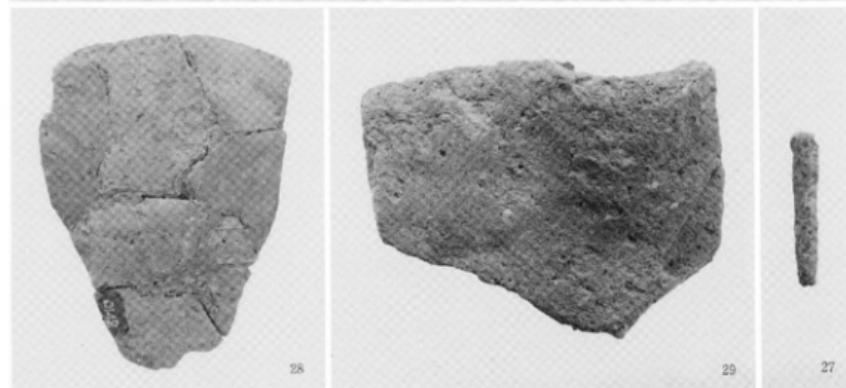
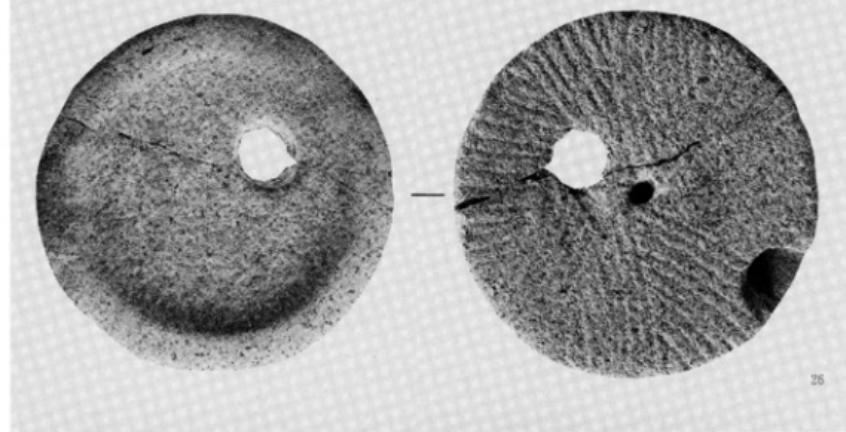
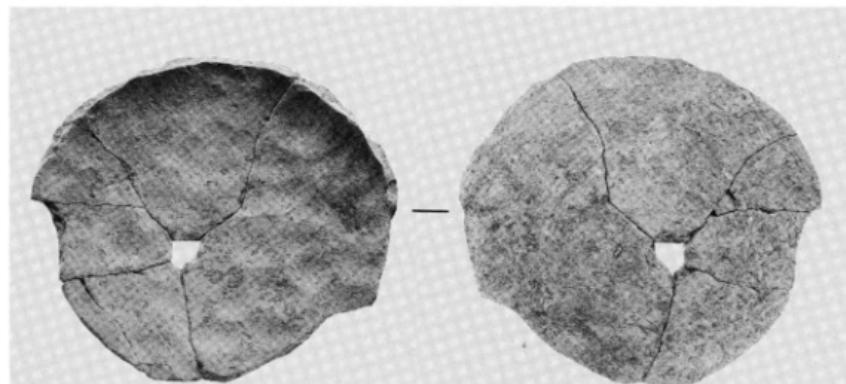
土塙 1 全景（北から）



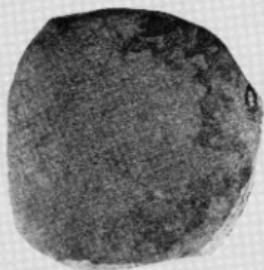
土塹 2 全景（東から）



窓状遺構全景（東から）



土壙 1 (25) 土壙 2 (26) 周溝状構造 (27~29)



30



31



32

河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

1989年3月

発行 河内長野市教育委員会

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

138
77